平成２６年１１月１４日

平成２６年「まほろば会秋の見学旅行」資料

北関東の遺跡巡り（忍城・稲荷山古墳ほか）

平成２６年１１月１４日（金）～１１月１６日（日）

まほろば会

はじめに

今回の見学旅行では、当会の旅行先としては過去にあまり選択されていなかった、北関東の「中・近世の城跡」と「古代の遺跡」を訪ねます。

現在の地理で言うと「埼玉県の北部」「栃木県南西部（ほんの一部）」そして「群馬県のほぼ全域」です。昔の呼び方では、埼玉県は関東の「北武蔵（国）」に相当します。栃木県は「下野国」そして群馬県は「上野国」と、ほぼ一致します。

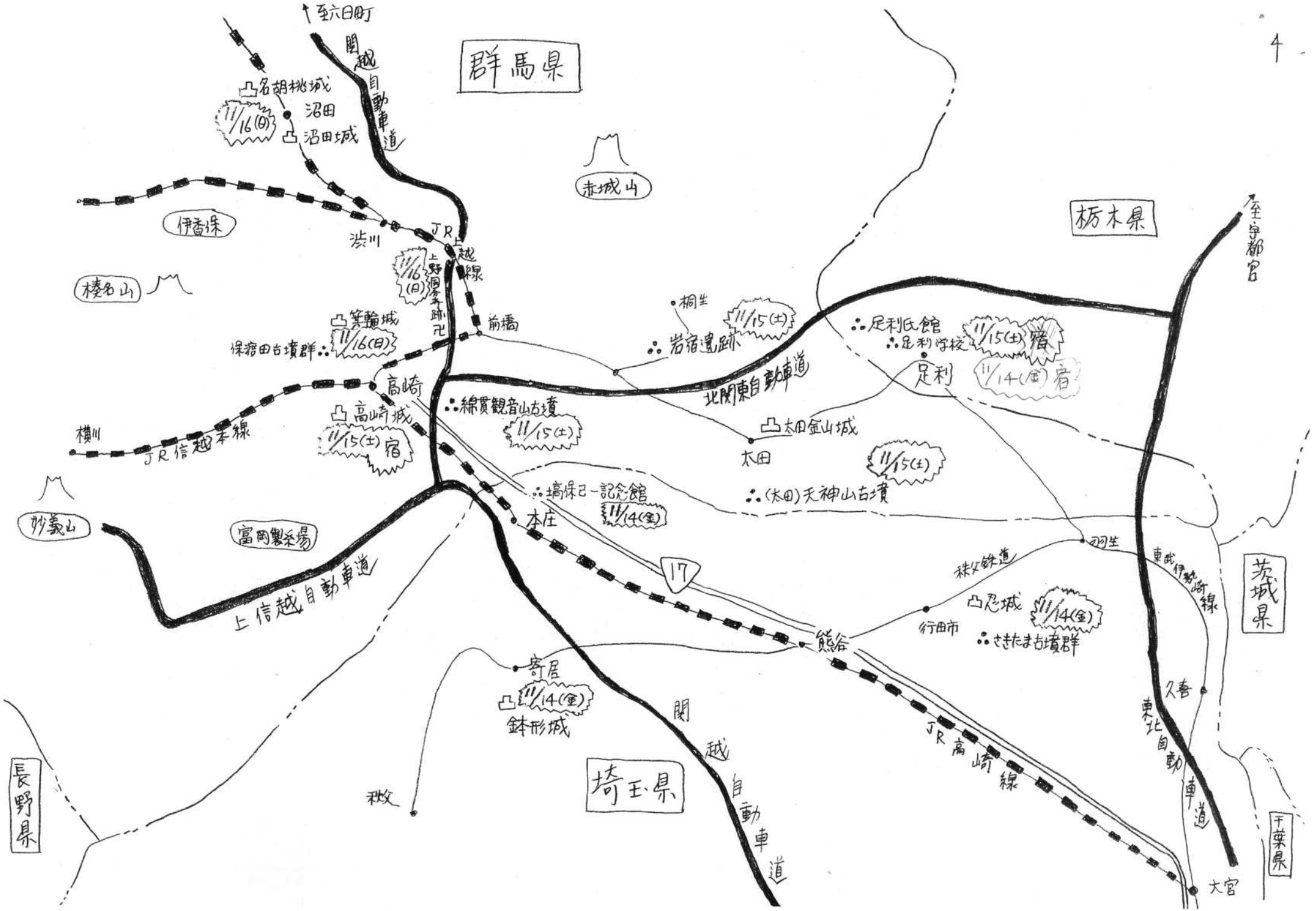
埼玉県には古い遺跡が多く、今回の見学旅行の訪問先の一つの目玉である、埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した「ワカタケル大王」の銘のある鉄剣（国宝）は、五世紀後半の「ヤマト王権（三世紀後半から四世紀にかけて大和地方に出現した巨大勢力で、五世紀までにその支配が九州から関東にまで及んでいたものと考えられています。）」と東国の関係を示す重要な資料です。中世に入ると、多くの武士団が出現しますが、鎌倉幕府の成立後は中心を鎌倉に譲り、周辺地域となりました。室町幕府の時代には、関東管領の扇谷（おうぎがやつ）上杉氏が河越城を根拠としますが、戦国時代後期には北条氏の勢力に押され滅亡し、北条氏の支城が埼玉県各地に作られます。今回見学する、寄居の「鉢形城」はその代表格でしょう。

栃木県には、旧石器時代の遺跡をはじめ、各地に縄文時代からの遺跡や古墳が多数存在します。古代は毛人（もうじん）の住む「毛野（けの）国」で、七世紀後半にヤマト朝廷の支配下に置かれ、「下野国」となりました。鎌倉幕府が成立すると、足利・小山・宇都宮・那須などの下野の武士団は「御家人」となりました。今回の見学先である「足利学校」（日本最古の学校！）は、室町時代の１４３９年に関東管領の上杉憲実（のりざね）が書簡を寄進し、学徒三千人を擁する仏典や儒学の研究機関となったものです。

群馬県は海に接しない内陸県で、前橋・高崎の二中核市、伊勢崎・太田の二特例市があります。原始時代の有名な遺跡として、日本に旧石器時代があったことを証明した「岩宿遺跡」があります。当会では久しぶりの再訪問となります。古代は栃木県と同じく「毛野国」で、四世紀から前方後円墳が数多く残っています。今回の見学地としては「綿貫観音山古墳」「保渡田古墳群」を堪能していただきます。律令制時代、上野国の国司は親王が任じられたため、現地の実質的な長官は「上野介（すけ）」であり、忠臣蔵で有名な「吉良義央（よしひさ）」もこの官名を名乗っていました。群馬県は、その名前のとおり良馬の産地で、中小武士団が林立したところです。鎌倉幕府末期、「新田荘（にったのしょう）（太田市）」を根拠とする新田義貞は、後醍醐天皇の倒幕運動に参加し、稲村ケ崎に出現した干潟を通って鎌倉に攻め込んだことで有名ですね。戦国時代には、上野国をめぐって上杉・武田・北条の三氏が争い、北条氏が真田氏の「名胡桃城」を奪取した事件は、豊臣秀吉の小田原城攻めの契機となったのです。今回は、この「名胡桃城」そして「沼田城」を見学します。まさに、歴史の転換点にタイムスリップすることが出来ます。

今回の見学旅行も欲張りな企画になりました。それでは、２泊３日の「まほろば会秋の見学旅行（北関東の遺跡巡りの旅）」を、一緒に楽しみましょう。

幹事一同


群馬県
栃木県
茨城県
埼玉県
長野県
千葉県
至六日町
関越自動車道
名胡桃城
11/16(日)
沼田
沼田城
伊香保
渋川
JR上越線
11/16(日)
上野国分寺跡
榛名山
箕輪城
11/16(日)
保渡田古墳群
前橋
高崎
高崎城
11/15(土)
宿
横川
JR信越本線
妙義山
富岡製糸場
上信越自動車道
赤城山
桐生
岩宿遺跡
11/15(土)
北関東自動車道
足利氏館
足利学校
11/15(土)
宿
足利
11/14(金)
宿
太田金山城
太田
11/15(土)
(太田)天神山古墳
線貫観音山古墳
11/15(土)
塙保己一記念館
11/14(金)
本庄
17
熊谷
寄居
11/14(金)
鉢形城
秩父
関越自動車道
JR高崎線
羽生
秩父鉄道
東武伊勢崎線
忍城
11/14(金)
行田市
さきたま古墳群
久喜
東北自動車道
大宮
至宇都宮

平成２６年度　まほろば会秋の見学旅行（北関東の遺跡巡り）予定表

＜日程＞　平成２６年１１月１４（金）から１６日（日）までの２泊３日の旅行です。

＜集合＞　１１月１４日（金）８時３０分までに「JR 大宮駅南改札口（新幹線南乗換口）」付近に集合します。

＊全員集合ののち、埼玉自動車交通のバスに乗車し、下記「見学予定地」を回ります。

＜解散＞　１１月１６日（日）１８時ごろ「JR 大宮駅」にて解散します。

＜見学予定地＞

１１月１４日（金）	さきたま古墳群	行田市大字佐間等地内	TEL048-559-1111（博物館）
（昼食）	創作和食「渡ら瀬」	行田市向町２４－３	TEL０４８－５５５－６６５５
	行田市郷土博物館	行田市本丸１７－２３	TEL０４８－５５４－５９１１
	鉢形城（歴史館）	大里郡寄居町鉢形２４９６－２	TEL０４８－５８６－０３１５
	塙保己一記念館	本庄市児玉町八幡山４４６	TEL０４９５－７２－６０３２
（宿泊地）	「ニューミヤコホテル別館」	足利市田中町６３４	TEL０２８４－７２－３３３３
１１月１５日（土）	足利氏館（鑁阿寺）	足利市家富町２２２０	TEL０２８４－４１－２６２７
	足利学校	足利市昌平町２３３８	TEL０２８４－４１－２６５５
	金山城ガイダンス施設	太田市金山町４０－３０ほか	TEL０２７６－２５－１０６７
（昼食）	「美喜仁」	桐生市本町４－７８	TEL０２７７－４４－５９２１
	岩宿遺跡	みどり市笠懸町阿左美 1790-1	TEL０２７７－７６－１７０１
	綿貫観音山古墳	高崎市綿貫町１７５２	TEL027-226-4681（県教育委員会）
	高崎城址	高崎市榛名湖町８４９	
（宿泊地）	「APA ホテル高崎駅前」	高崎市八島町２３２－８	TEL０２７－３２６－３１１１
１１月１６日（日）	上野国分寺跡ガイダンス施設	高崎市引間２５０－１	TEL０２７－３７２－６７６７
	保渡田古墳群 博物館	高崎市井出町１５１４	TEL０２７－３７３－８８８０
	箕輪城	高崎市箕郷町東明屋	TEL027-371-5111（箕郷支所）
（昼食）	「尾瀬遊山」	利根郡白沢村上古語父１７９	TEL０２７８－５３－２３３９
	沼田城	沼田市倉内	TEL0278-23-7565（沼田市）
	名胡桃城	利根郡みなかみ町下津	

埼玉古墳群

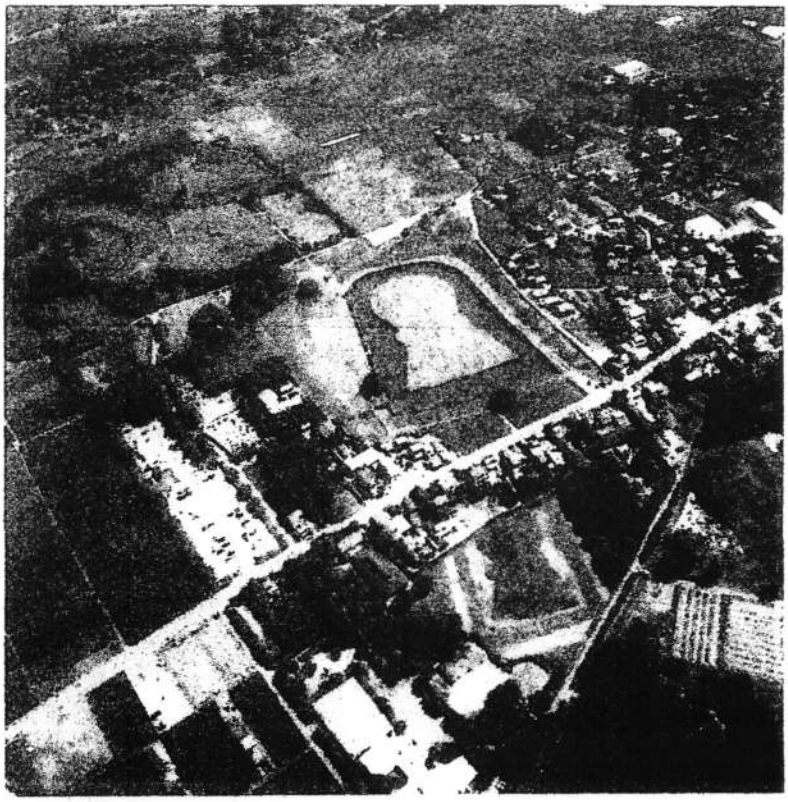
さきたまこふんぐん

群集する九基の大型古墳

埼玉古墳群は県名発祥の地である行田市埼玉にあります。周辺には利根川と荒川が流れており、両河川の水運を利用した物資、文化交流の要衝として古代から栄えてきました。

埼玉古墳群には、直径一〇五メートルで日本最大の円墳である丸墓山古墳と、二子山古墳、将軍山古墳、稲荷山古墳、愛宕山古墳、鉄砲山古墳、奥の山古墳、中の山古墳、瓦塚古墳の八基の前方後円墳（ただし、稲荷山古墳だけは周濠が長方形のため前方後方墳の可能性あり）が含まれます。これらの古墳は、五世紀末の稲荷山古墳に始まり、七世紀の初めまでの約百年にわたって次々と築造されました。それぞれの前方後円墳は後円部を北東にして、主軸方向をほぼ北東―南西にそろえており、南北約八〇〇メートル、東西約五〇〇メートルの範囲に計画的に築造されたことを伺わせます。

この地域約三〇万平方メートルは、現在、「さきたま風土記の丘」として整備されています。



埼玉古墳群

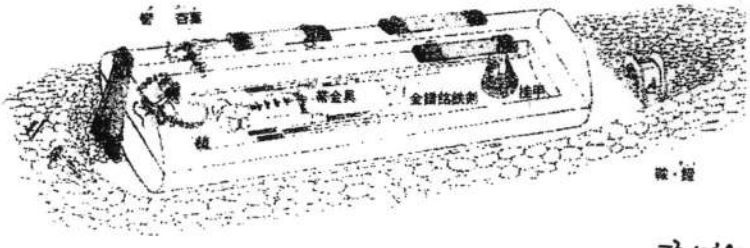
古代史を語る一一五文字の鉄文

墳丘の全長が一二〇メートルの稲荷山古墳は、昭和四三年（一九六八）の発掘調査で二基の埋葬施設が発見され、多くの遺物が出土しました。その中でも名高いのが金象嵌「辛亥年」銘鉄剣の銘文です。

発掘当初は鉄錆と、鞘の木質とに覆われていたために銘文があることはわかりませんでした。しかし、発掘から一〇年後に行われたX線調査によって、剣の表に五七字、裏に五八字、合わせて一一五文字もの文字が浮かび上がりました。

銘文には辛亥年という年号が記されていて、四七一年とする説が有力です。

金象嵌「辛亥年」銘鉄剣。銘文は「辛亥の年の七月中、記す」に始まり、銘文の主人公ヲワケと、その先祖の名が連綿と書かれていた。そして、ヲワケが「杖刀人」（ジョウトウジン＝大王の護衛か？）の首（オサあるいはオビト＝長官）として、ワカタケル大王（雄略天皇と思われる）を補佐した記念にこの剣をつくらせ、銘文を刻ませた、とある



復原された礫槨の埋葬の様子。昭和43年（1968）の発掘調査で稲荷山古墳後円部のやや端近くで、河原石を敷き詰めた礫槨が見つかった。珍しく盗掘されていなかめ、当時の副葬品の並べ方がわかる貴重な例となった。現在、古墳頂上部には礫槨の出土状況が復原されている

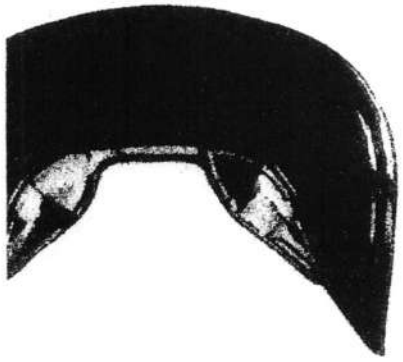
全国3位

これは、古事記や日本書紀の完成よりも古い年代で、時期を特定できる文字資料として貴重なものです。そのほか、銘文の主人公と思われる「乎獲居（ヲワケ）」とその祖先の名、「獲加多支鹵（ワカタケル）」という大王の名などが読み取れました。熊本県の江田船山古墳から出土した大刀にもこの大王の名があり、雄略天皇を指すと見られています。

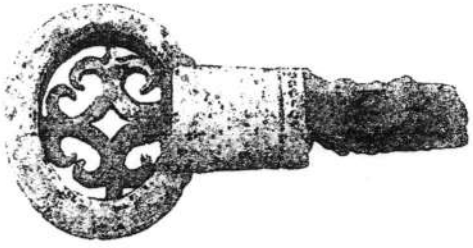
古墳時代の刀剣類に銘文が刻まれているものは、現在までに国内で七点が確認されていますが、文字数が一番多いのはこの金象嵌「辛亥年」銘鉄剣です。古代においては辺境と思われがちな関東から、これほどの文字が見つかったことは極めて重要です。

このほかにも、稲荷山古墳からは画文帯神獣鏡が発見されています。これと同じ種類の銅鏡は群馬、千葉、三重、福岡、宮崎など全国各地から出土しています。

また、将軍山古墳の石室からは銅鏡、飾り大刀、蛇行状鉄器（旗ざお）、馬冑などが発見されていますが、これら出土品の中でも目をひくのが馬冑です。馬冑は戦闘用の馬の頭部に装着する鉄製の冑です。似たような形の馬冑は朝鮮半島南部や高句麗の墓から見つかっています。



左2点／将軍山古墳から出土した馬冑と鞍を飾った金具。乗馬の風習は朝鮮半島から伝わり、6世紀には関東地方にも広まっていたと考えられている



上／将軍山古墳出土の金銅製環頭大刀の柄頭
左／稲荷山古墳出土の金銅製鈴付龍文透彫帯金具。革のベルトの飾り板

将軍山古墳の墓には将軍山古墳展示館があります。ここではたたき締めながら土を盛って（版築）つくった墳丘の様子や、復原された横穴式石室を見学することができます。

●埼玉県行田市

酒巻古墳群

渡来文化を色濃く残す古墳

さかまきこふんぐん

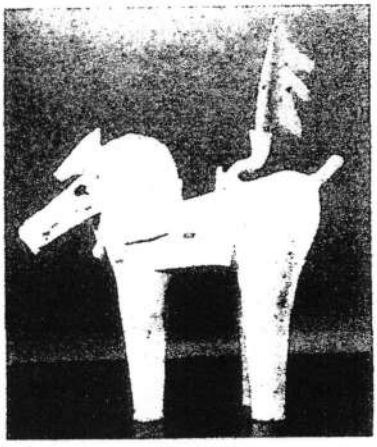
築造は六世紀末頃と推定さ

稲荷山古墳から北に約六キロメートル進んだ、利根川の河岸に位置するのが酒巻古墳群です。ここに築かれた三基の前方後円墳と二〇基の円墳は、川の氾濫による土砂で完全に埋まっていました。

昭和六一年（一九八六）に酒巻古墳群の発掘調査が行われ、水田の下に埋もれていた一四号墳から特徴のある埴輪が出土しました。冠をかぶり、長手の筒袖の服装をした男子像や、着衣の上に褌を締めた男子像などです。長い筒袖の服装は高句麗の古墳壁画と酷似しています。また、旗ざおをつけた珍しい馬形の埴輪も見つかりました。この埴輪によって将軍山古墳から出土した「蛇行状鉄器」が旗ざおであることが証明されたのです。

一四号墳の

袖の男子像



一四号墳から出土した、旗を立てた馬形埴輪。朝鮮半島とのつながりを感じさせる

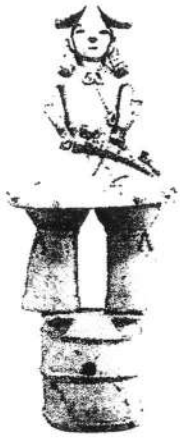
●群馬県高崎市

綿貫観音山古墳

わたぬきかんのんやまこふん

金銅製品などの副葬品が多数出土

綿貫観音山古墳は、小高い台地の端に築かれた全長九七メートルの前方後円墳です。古墳時代後期末の築造と推定され、二段の墳丘と二重の濠をもつ、優美な姿をしています。盗掘を免れたため、豊富な副葬品がもとの位置を保ったまま出土したことでも注目されました。



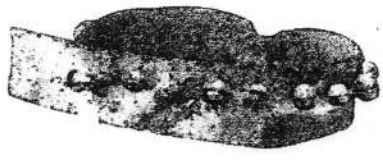
貴人埴輪（高さ一五五・五センチ）

後円部にある全長一二・五メートルの巨大な横穴式石室から、二面の銅鏡や金銅製鈴付大帯、鉄刀、冑、銅製水瓶、馬具、須恵器などが出土し、被葬者の身分や性格を知ることができました。例えば銅鏡の一枚は、百済の武寧王陵の銅鏡と同型品ですし、冑や水瓶には中国の影響が見られます。こうした点から、被葬者が海外の文化を摂取できる人物であったこと、乗馬や馬に関する仕事にかかわっていた可能性が考えられます。

石室入り口近くで出土した三人童女の埴輪や、あぐらを組み合掌する男子埴輪などは、当時の葬送の様子をほうふつとさせる装飾性の高い優れたものです。

これらの多彩な出土品は群馬県立歴史博物館で見ることができます。石室内部の見学は県教育委員会文化課に申し込みが必要です。

長い頸と楕円形の胴をもつ銅製水瓶。法隆寺（奈良県）や、中国の山西省の墓から似たものが出土している。銅製の水瓶としては日本最古のもの



金銅製鈴付大帯。20個の鈴がつく、幅9.4cm、全長105cmの金銅板で、内側に銀装円頭柄の刀子が装着されていた。男性埴輪がつけているものと同じで、日本ではほかに藤ノ木古墳（奈良県）と山王二子山古墳（群馬県）出土のものがあるのみ

被葬者を記した碑がある古墳

南西部の丘陵の東端にある山上古墳は、古墳時代終末（時代）につくられた直径15mの小型の円墳です。近武10年（681）に建てられたと思われる山上碑があ約1.1mの輝石安山岩の自然石に「放光寺の僧・長利めに建てた」という碑文（4行、53文字）が刻まれて。これは古墳の墓碑と見なされている唯一の例で、多野郡吉井町）、金井沢碑（高崎市）とともに、上野三碑られています。

墳群の西には、山王廃寺と呼ばれた7世紀後半創建での寺院跡の1つがあります。ここから山上碑に記され寺」の文字を刻んだ瓦が出土し、放光寺跡とわかりま材加工技術が宝塔山古墳と似ていることから、寺院を豪族の墓が総社古墳群と見られています。

山上碑の碑文

辛巳歳集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒売刀自此
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児
長利僧母為記定文也　放光寺僧

現代語訳
「辛巳の歳集月三日記す。佐野の三家と定め賜える健守命の孫黒売刀自、此れ

●群馬県前橋市

総社古墳群

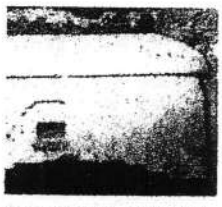
そうじゃこふんぐん

前橋市に密集する古墳群

前橋台地上に分布する総社古墳群は、いずれも古墳時代後期から終末期にかけて築造されました。

二子山古墳は、二段築成の前方後円墳で、六世紀後半の築造と推定されています。全長約九〇メートル、後円部径四四メートルで、前方部と後円部にそれぞれ石室をもちます。

七世紀中頃につくられた宝塔山古墳は一辺約六〇メートルの二段築成の方墳です。横穴式石室は安山岩の切石でつくられており、いました。玄室に置かれた家形石棺は玄門よりも寸法が大きく、まず石棺を安置してから石室をつくったものと推測されています。



の家形石棺。下部は各ともに伝わった格挟間て四脚になっている

切石で組まれた蛇穴山古墳の石室入口。冠材上方の掘り込みは、のちのもの

蛇穴山古墳は七世紀末頃の築造です。一辺約三九メートルの二段築成の方墳で、石室の天井や壁はそれぞれ一つの巨石で構成されています。

近畿地方で大規模な古墳がつくられなくなったあとも、この地で古墳がつくられ続けたことから、上野の豪族が独自

三ツ寺Ⅰ遺跡

みつでらいちいせき

防御機能を備えた豪族の館跡

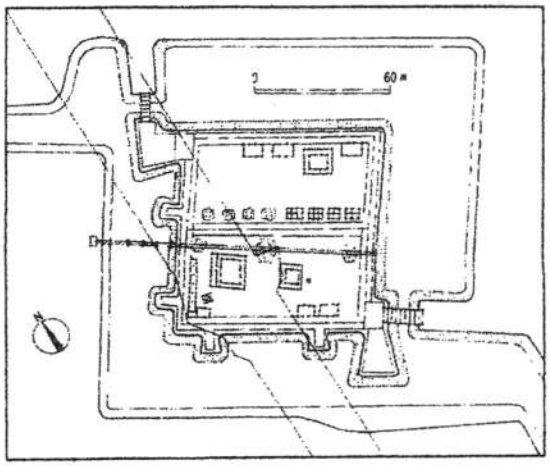
古墳時代後期の豪族の館跡である三ツ寺Ⅰ遺跡は、昭和五六年（一九八一）、上越新幹線建設のための調査の際に発見されました。遺跡は保護のために埋め戻され、現在はその上に高架の線路が設けられています。

遺跡は一辺約八六メートルの方形で周囲に三重の柵列をめぐらせ、さらにその外側は猿府川から水を引き込んだ幅約三〇メートル、深さ四メートルの濠で囲まれています。厳重な防御機能が設けられていたことから、この地を支配していた豪族が政治的な用途のために使っていたと推測されています。

内部は柵列によって北と南の二つの空間に分けられていました。北は竪穴住居のある生活の場ですが、南は中心となる大きな掘立柱建物や井戸などがあり、政治や儀式の場と考えられます。また、木樋を使って館の外部から水を引き込んでいた石敷の祭祀場も見つかっており、水に対する祭祀も行われていたようです。

館は榛名山の大噴火によって廃絶し

推定復原図



手前半分には首長の住居や祭祀場が、奥には一族の住居や倉庫があった

館を囲む濠の斜面には、古墳と同様の葺石があり、厳重な防御構造となっている

子持勾玉などの滑石製模造品。武器や武具、農工具などの器物を模したもので、祭祀の際に使われた

●群馬県群馬郡

保渡田古墳群

ほどたこふんぐん

三基の前方後円墳からなる古墳群

二子山、八幡塚、薬師塚の三基の前方後円墳からなる保渡田古墳群は、三ツ寺Ⅰ遺跡の北西約一キロに位置しています。古墳時代中期末の築造で、いずれの古墳も、全長一〇〇メートル余りで二重の濠をもち、後円部には舟形石棺が二基おさめられています。

最初につくられた二子山古墳では、人物や動物の埴輪が大量に出土しました。

二子山古墳に続いてつくられた八幡塚古墳では、さまざまな形象埴輪がまるで劇の一場面のように配置されており、首長を受け継ぐ儀式を表していると推測されています。

最後につくられた薬師塚古墳では、先の二つの古墳に比べて埴輪の量が激減します。

保渡田古墳群は三ツ寺Ⅰ遺跡と築造時期が近いことや築堤の技法に共通点が認められることから、同じ集団がつくったものと思われます。

復原された八幡塚古墳

下芝谷ツ古墳

三ツ寺Ⅰ遺跡から西に約1.5kmの場所ある下芝谷ツ古墳も、榛名山の噴火により埋没しました。そのため、二段築成の方墳の形状を当時のままに保っています。これは、方形の土の墳丘の表面を葺石で覆い、さらにその上に転石を積み上げて積石塚状にした珍しい古墳です。ここからは円筒埴輪列が完全な形で出土するなど、貴重な資料が相次いで見つかっています。

また、竪穴式石室からは、朝鮮半島の強い影響を受けた、歩揺とガラス玉で装飾した金銅製の沓（飾履）が片足分だけ出土しました。

この古墳の葺石は、三ツ寺Ⅰ遺跡の濠の葺石と類似しており、双方に何らかの関係があることが推測されています。

付近にある「かみつけの里博物館」には、下芝谷ツ古墳や三ツ寺Ⅰ遺跡、保渡田古墳群の出土品や、詳細な説明が展示されています。

北関東の城跡を見学するにあたって

＜第一日目＞　忍城　鉢形城
＜第二日目＞　足利氏館（鑁阿寺）　太田金山城　高崎城
＜第三日目＞　箕輪城　沼田城　名胡桃城

今回の見学旅行では、「さきたま古墳群」「保渡田古墳群」のような古墳時代の遺跡を見学すると同時に、上記の中世・近世に注目された「城（跡）」を巡ります。それぞれの城の詳細な説明は後のページに譲りますが、ここでは大まかな年代と築城（整備）の背景などを若干ご披露したいと思います。

1．　築城年代

① 鎌倉時代	１１９６年	足利氏館（鑁阿寺）	日本１００名城・国宝
② 戦国時代	１４６９年	太田金山城	日本１００名城・関東七名城
	１４７６年	鉢形城	日本１００名城
	１４７９年	忍城	
	１４９２年	名胡桃城	
	１５００年頃	箕輪城	日本１００名城
	１５３２年	沼田城	
③ 安土桃山時代	１５９７年	高崎城（ただし、元になった「和田城」は平安時代末期）	

2．　主な城主

・足利氏館　：源姓足利氏二代目「足利義兼」が居館として建築。その後、室町将軍家・鎌倉公方家など足利氏の氏寺として手厚く保護された。

・太田金山城：築城主は、新田一族であった「岩松家純」。後に「北条氏」の支城となった。

・鉢形城　：築城主は、関東管領山内（やまのうち）上杉氏の家臣「長尾景春」。その後「北条氏」が整備拡充し、北関東支配の拠点とした。

・忍城　：築城当時の城主は、「成田顕泰（あきやす）」。城代「成田長親（ながちか）」の時、石田三成の「水攻め」を受けた。

・名胡桃城　：沼田城の支城として「沼田氏」によって名胡桃館が築かれたのが最初とされている（伝承）。史料上では、1579年に武田勝頼が家臣の「真田昌幸」に命じて築かせたもの。1590年の「小田原征伐」の誘因となったことで有名。

・箕輪城　：1500年前後に長野氏（1512年に長野業尚（なりなお）築城の説あり）が築城。長野氏は、関東管領・山内上杉家に属していた。長野業正（なりまさ）の時代に、「箕輪衆」と呼ばれる在郷武士団をよく束ね、「名君」と謳われて長野氏全盛時代を築いた。

・沼田城　：沼田顕泰（あきやす）により築城。1580年真田昌幸により沼田氏は滅亡。その後、上田城（長野県上田市）と並ぶ真田氏の拠点となる。

・高崎城　：高崎城の地には、古くは「和田城」と呼ばれる平安時代末期にこの地の豪族和田義信が築城したと言われる城があった。「小田原征伐」の後関東に入った徳川家康の命により、「井伊直政」が1597年に和田城の城地に近世城郭を築いた。

3．　歴史的背景

① 埼玉県

a．古代

埼玉県は、関東の「北武蔵」に相当する。六世紀、武蔵地域では国造（くにのみやっこ）の地位を巡る争いが起き、「日本書紀」によれば、北武蔵の勢力が南武蔵の勢力を打倒しこの「武蔵国造（こくぞう）の乱」に勝利し、自らの勢力圏の埼玉（さきたま）地域に大型の古墳群を築いている。七世紀半ばには、「ヤマト王権」により中央集権体制が整えられ、武蔵地域にも「武蔵国」が置かれた。

平安期には律令の公地公民制は崩れ、各地に「荘園」が開かれた。その過程で地方政治は混乱し、九世紀の武蔵国は「凶猾党をなし、群盗山に満つ」状態に突入。各地に武装した武士団が生まれ、「武蔵七党」と呼ばれた多くの武士団が北武蔵を根拠地とした。十二世紀末には、源頼朝の支配下に入り源氏の幕府を支える拠点となった。

b．鎌倉・室町時代

頼朝の死後、畠山氏や比企氏など武蔵の有力武士が相次いで執権の「北条氏」の謀略により滅亡すると、武蔵の国務の実権は北条氏に握られる。北条氏は巨大な権力を背景として武蔵の開発に努め、国内の開墾・治水は急速に進んでいった。後醍醐天皇挙兵による南北朝時代には、武蔵武士も北朝・南朝方に分かれて戦い、「観応の擾乱」（足利直義と高師直の対立が全国的な紛争に発展）・「武蔵野合戦」（新田義興の挙兵が発端）で、武蔵国は混乱を極めた。

１３５３年、足利尊氏が上洛すると、南朝方の侵攻に備えるため、入間川に「鎌倉公方足利基氏の御所」が設けられた。武蔵国が一時鎌倉に代わって「幕府の東国支配の拠点」となったのである。その後、関東管領に復帰した「上杉憲顕」が鎌倉府の実権を握ると、武蔵の有力武士に圧力を加え始め、それに反発して秩父氏一族による「平一揆（へいいっき）」の反乱が勃発。乱はほどなく鎮圧されたが、それを機に武蔵土着の有力武士は力を失い、関東管領上杉氏の支配下に組み込まれていく。

c．戦国時代

関東一円では、１４５４年の「享徳の乱」以降から争乱状態に陥っており、戦いには必ず「古河公方」と「山内（やまのうち）・扇谷（おおぎがやつ）」の両上杉氏の姿があった。戦国時代の幕開けを飾った「北条早雲（本拠地は伊豆国韮山）」の子「北条氏綱」は、早くから関東進出を目論んでおり、１５２４年に江戸城を攻略。江戸城に足掛かりを得た氏綱は、翌年に岩槻城を奪取し武蔵北部に侵攻した。江戸城を追われた上杉朝興（ともおき）は、越後国の長尾為景（上杉謙信の父）に援軍を求めるなど、戦乱はますます長期化そして拡大化した。

「北条氏康」の代になっても上杉氏との戦いは続き、ついには越後国の長尾景虎（のちの上杉謙信）が上杉氏に支援の手を差し伸べた。以降、北条氏は今川氏・武田氏との三国同盟を基軸としつつ、上杉氏と何度も戦いを交えることとなった。

この間、北条氏は領域支配を進めるため、各領国に「支城」を設置し、城主として一族や重臣を配置した。この支城ネットワークが支配の根幹となった。埼玉県下では、松山城・鉢形城（今回の見学地）・岩槻城などに北条氏から支城主が送り込まれた。しかし、豊臣秀吉による１５９０年の「小田原城攻め」により北条氏は滅亡、埼玉県下では「忍城」（今回の見学地）が最後まで粘ったが、小田原城開城の１１日後に開城し戦国時代は終わった。

② 栃木県

a. 古代

栃木県では、那珂川・鬼怒川・渡良瀬川といった多くの河川が、那須連山・日光連山などの山間を縫って北関東の平野に出て利根の大河に注ぐ。旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺跡や古墳群はこれらの川に沿って点在する。栃木県では北部に「前方後方墳」が多く、南部に「下野型古墳」と呼ばれる「前方後円墳」が多く分布する特徴がある。

現在の栃木県と群馬県は、もともと「毛野（けの・けぬ）」という一地域をなしていたと考えられている。関東北部一帯に勢力をもった「毛野国」。それが五世紀から六世紀にかけて上下両国（栃木県は「下野（しもつけ）国」）に分かれ、ヤマトの王権に服属するようになる。

下野国には、都を出て近江・美濃・飛騨・信濃・上野と通ってきた「東山道」が通過。その「道の奥」陸奥への入り口となっている。そのおおよそのルートは上野国の新田（大田市）から下野国に入り、足利・佐野を経て国府（栃木市）を通り、宇都宮などを経て陸奥国白河に抜けたと考えられている。

東北の「蝦夷」に対する前線基地としての地政学的立地が、古代下野国の歴史に作用した面は大きい。「兵（つわもの）」と呼ばれた武力集団が各地に勃興してくる理由の一つにもなっている。

b. 鎌倉・室町時代

打倒平氏の兵をあげた源頼朝のもとに下野からも多くの武士が馳せ参じたが、真っ先に駆け付けた小山（おやま）氏は、鎌倉幕府樹立後幕府の宿老「下野守護」となった。その小山氏と双璧と言えるのが、鎌倉御家人でありながら宇都宮明神の神主を務めた「宇都宮氏」である。宇都宮氏は和歌の興隆にも意を注ぎ、文化レベルの高さを示した。

下野の文化レベルの高さを示したもう一つの事例が、「足利学校」（今回の見学地）の存在である。中世日本における唯一の大学で、全国から多くの学徒を招いて学問の興隆に貢献した。政治的には、この時期足利氏による覇権の確立により、下野の豪族たちは次第に中央権力に圧迫され、平安以来の名族小山氏は一時断絶する。

c. 戦国時代

下野には一国を統一するような権力はなく、宇都宮・小山・那須などの各氏が群雄割拠した。これに古河公方が加わり、さらにのちになると南関東から後北条氏が、越後から上杉氏が襲来した。１５６１年３月、上杉氏の名跡を継いだ謙信は、後北条氏の居城（小田原城）を取り囲み、謙信は関東管領に就任し古河公方として「足利義氏」を擁立した。この謙信の関東出兵以降、下野の領主は後北条氏と上杉氏との間で翻弄され続けることとなった。その後、下野の国衆たちの一致団結による後北条氏への反撃などもあったが、豊臣秀吉による１５９０年の後北条氏滅亡（小田原城開城）により、下野は新たな外部勢力の下に入った。

③ 群馬県

a. 古代

戦前までは「日本には存在しない」とされてきた「旧石器時代」の存在が、「岩宿遺跡」（今回の見学地）の発見により疑いないものとなった。旧新田郡笠懸村での世紀の大発見であった。そして、隣の栃木県同様、水資源の豊富さと肥沃で広大な農耕適地の存在は、弥生時代から古墳時代にかけて、「毛野」を「東国」の中でも屈指の有力地域たらしめた。

さらに群馬県域に当たる「上毛野」は、豊穣をもたらした南東部の河川と北西部の高山とが、軍事的観点から考えると実に理想的な天然の要害をなし、五世紀には大型の古墳が多数建造される。その後律令国家体制に飲み込まれていくが、十世紀におこった「平将門」の動きから、その後続く兵（つわもの）どもの荒々しい活動が、「東国」の存在を印象付け、時代は中世へと入っていく。

b. 鎌倉・室町時代

十二世紀末、源頼朝によって関東に本格的な武家政権が生まれると、上野武士の多くも頼朝の陣営に馳せ参じ、１１８９年の奥州合戦や翌年の頼朝上洛に従った。１１９３年の上野国三原（吾妻郡）での大規模な「巻狩」（軍事演習）を通して、頼朝は上野武士を護衛として奉仕させることで自身への従属を確認し、幕府権力の浸透を図った。

鎌倉時代前半の上野をリードしたのは、源頼朝の側近「安達盛長」とその子孫だった。挙兵前から頼朝に仕えた盛長は、「上野国奉行人」（上野守護）となり、その地位は子孫に引き継がれた。しかし、「安達泰盛」が１２８５年の霜月騒動で北条得宗家の御内人（みうちびと）に敗れて没落すると、上野には北条氏の勢力が急速に浸透していく。得宗権力の浸透著しい上野であったが、１３３３年赤間山麓で挙兵した「新田義貞」は、武蔵を南下して、鎌倉に攻め込み北条得宗家を滅亡させた。だが、間もなく足利尊氏と後醍醐天皇の対立により南北朝の内乱が始まると、義貞は南朝方の主力として各地を転戦し、越前で敗死する。新田宗家は没落し、代わって関東管領・上野守護の上杉氏と守護代長尾氏が勢力を伸ばし、新田荘では新田氏庶流の「岩松氏」が新たな主役となる。その後、関東管領上杉氏の威光も失墜し、上野は相模の後北条氏や越後の上杉謙信らの覇権争いに翻弄されていく。

c. 戦国時代

１５６０年８月、越後に本拠を構える上杉謙信は、関東管領上杉憲政を擁して関東へ出兵し、直ちに上野の国衆を配下に収め支配を展開した。一方で、甲斐の武田信玄も西上野侵攻を着々と準備しており、１５６６年ついに高崎市の「箕輪城」（今回の見学地）を落城させた。上野は甲斐と越後に挟まれた境目の地であった。

このように、上野国内では上杉氏と武田氏が覇を競っていたが、両雄が相次いで没すると事態は大きく変化した。中でも一番の大きなきっかけとなった出来事は、１５８２年の武田氏の滅亡である。武田氏滅亡の翌年、好機と見た北条氏直は「厩橋（まやばし）城」（前橋市）を攻略すると、さらに西上野へも進出を始めた。両雄の亡き後、積極的に上野で支配を展開したのは、後北条氏であった。後北条氏は支城ネットワークを構築し、重要な拠点となる城郭の整備を積極的に進めている。さらに支配の面においても、伝馬（てんま）制を採用するなど、これまでにない最先端の政策を採用した。

しかし、１５８９年「名胡桃城」（今回の見学地）をめぐって後北条氏と真田氏が争うようになると事態は急変した。豊臣秀吉は自身の政策である惣無事（そうぶじ）に基づき両者に裁定を下したが、後北条氏はこれに反して名胡桃城を奪還。これに激怒した秀吉は、翌年小田原に出兵、後北条氏を滅亡させた。

4．　ご参考になれば――

① 県名は「さいたま」なのに、古墳は「さきたま」何故？

「埼玉」の名は現在の行田市付近にあった埼玉（さきたま）郷に由来すると考えられます。現在も埼玉（さきたま）の地名が市内に残っています。埼玉の意味は武蔵国多摩郡の奥に

ある土地の意味で「さきたま（前多摩・先多摩）」が転じて「埼玉」になったとする説、「さき（前）」「たま（湿地の意味）」が転じて「埼玉」になったとする説、「幸魂（さきたま）」から「さいたま」へ転じたとする説などがありますが、いずれにしても当て字です。ただ、埼玉古墳群に隣接して建つ前玉（さきたま）神社は、「延喜式」内の神名帳（じんみょうちょう）に記されていて、そこには「さいたま」と「さきたま」の二通りの読み方が記されています。また、「万葉集」などにも「佐吉多万」の文字が見られます。

廃藩置県の後に、岩槻県、川越県、大宮県、浦和県など多くの県が出来ましたが、明治4年に入間県と埼玉県の2県に、明治9年に埼玉県に統合されたのです。新しい名称には、ライバル意識の強い大宮や浦和、川越を避けて、一番面積が広い埼玉郡の名を使うことになったといわれています。

埼玉の「埼」は珍しい字です。崎と同じで岬（みさき）を意味し、崎と埼の違いは、前者は旧陸軍の陸地測量部（現在の国土地理院）が地図に使い、後者は旧海軍の海洋情報部が海図に使ったそうです。この海図では、航海者が岬を地形で容易に見分けられるように、埼、碕、岬、鼻と使い分けたそうです。すなわち「埼」は陸地が水（海）に突き出した場所で、「崎」は山の様子が険しいことを意味したのですが、国土地理院の地図は慣習ですべて「崎」としているそうです。

②「関東管領」とはどんな組織（役職）だったのでしょうか？

関東管領（かんとうかんれい）は、南北朝時代から室町時代に、室町幕府が設置した鎌倉府の長官である鎌倉公方を補佐するために設置した役職名で、当初は関東執事（かんとうしつじ）と呼ばれていました。鎌倉公方の下部組織でありながら、任命権等は将軍にありました。

鎌倉府は観応の擾乱の直前の正平4年/貞和5年（1349年）室町幕府初代将軍足利尊氏が嫡男の義詮を鎌倉から京都へ呼び戻し、代わりに次男の亀若丸（基氏）を関東統治のために派遣したのがはじまりで、幼い基氏を補佐するために執事と呼ばれる補佐を置きました。京都にも将軍を補佐する執事（後の管領）が存在したため、これと区別するために「関東執事」と呼ばれました。当初は2人指導体制で、上杉憲顕、斯波家長、次いで高師冬、畠山国清らが任じられました。関東執事は初期においては斯波氏、畠山氏が就任していたが次第に上杉氏に独占されていき、最終的には上杉氏が世襲していくことになります。また、上杉氏は上野、伊豆の守護も担っていました。

足利直義方であった憲顕は失脚して越後で引退するが、正平17年/貞治元年（1362年）に基氏が願って復職した後、もしくは正平22年/貞治6年（1367年）に足利基氏が急死して、幼少の足利氏満が鎌倉公方を継いで憲顕が後見についた後、「関東管領」と呼ばれるようになりました。

関東管領は主に支配地域の守護及び地頭の管理に当たっていました。武蔵守護も兼任し、関東一円の武士を掌握し次第に鎌倉府以上の力を持つようになり、鎌倉公方と対立していくことになります。

永享10年（1438年）に第4代鎌倉公方足利持氏が6代将軍足利義教と対立すると、関東管領上杉憲実は持氏を諫めるが、自身が暗殺される風説が流れると、管領職を辞して上野に逃れ、憲実追討のために持氏が兵を起すと武蔵府中に陣を構え、幕府と連合して持氏を自害させ鎌倉府を滅亡させるまでに至ります（永享の乱）。永享12年（1440年）に下総の結城氏などが持氏の遺児を奉じて結城合戦と呼ばれる反乱を起こすと、鎮定に協力する

ために復職。その後憲実は遁世、文安4年（1447年）の鎌倉府再興まで東国支配を上杉氏が受け持つことになったのです。

再興後も鎌倉府と関東管領の対立は続き、持氏の遺児成氏が鎌倉公方となると、享徳3年（1454年）に成氏は関東管領上杉憲忠を暗殺。上杉氏と戦っている最中に幕府から派遣された駿河守護今川範忠に鎌倉府を追われると、成氏は古河を座所としました（享徳の乱）。古河公方と名乗った成氏と関東管領上杉顕定の間で和解が成立するのは28年後の事です。

なお、この乱の最中に足利政知が新たに堀越公方として関東に下るが、この際に政知の補佐役として上杉教朝・渋川義鏡が任命され、関東管領と区別するためにその旧称である「関東執事」が一時的に復活しています。

しかし、この間に庶流の扇谷上杉家が山内上杉家に迫る勢力を得たことから、長享元年（1487年）に顕定が扇谷上杉家討伐を開始（長享の乱）。18年続いたこの戦いは顕定の勝利に終わったが、通算して50年にわたった戦乱で関東はすっかり荒廃したうえに、扇谷上杉家が堀越公方を攻め滅ぼした伊勢宗瑞（北条早雲）を関東に招き入れたことによって、後北条氏の台頭のきっかけを作ってしまうことになります。

16世紀に入って後北条氏は関東中心部へと勢力を拡大していくが、山内上杉家は2度にわたる家督争いによって自ら勢力を後退させていき、天文15年（1546年）の河越夜戦において古河公方足利晴氏、関東管領上杉憲政、扇谷上杉家当主上杉朝定の連合軍が北条氏康に敗北すると、古河公方、山内上杉家は大打撃を受け、扇谷上杉家は朝定が討死して滅亡してしまいます。

その後、憲政は上野で北条氏へ抵抗するがうまくいかず、天文21年（1552年）に居城の平井城を失うと越後へ向かい、元は家臣筋であり外戚でもあった越後長尾氏を頼りにしました。永禄4年（1561年）に憲政は山内上杉家の家督と関東管領の職を越後三条長尾家の長尾景虎（後の上杉謙信）に譲り、景虎はこの時名を政虎（後に輝虎・法名は謙信）と改めます。しかし、既に関東管領は実質的には機能しておらず、謙信の死をもって終焉を迎えます。

③ 古河公方（こがくぼう）とは？

室町時代後期から戦国時代にかけて、下総国古河（現在の茨城県古河市）を本拠とした関東足利氏。享徳4年（1455年）、第5代鎌倉公方・足利成氏が鎌倉から古河に本拠を移し、初代古河公方となりました（享徳の乱）。御所は主に古河城。古河公方を鎌倉公方の嫡流とみなし、両方をあわせて関東公方と呼ぶこともあります。古河公方が成立した享徳の乱は、応仁・文明の乱に匹敵し、関東における戦国時代の幕を開ける事件でありました。旧来の政治体制が大きく動揺し、新興勢力の後北条氏が台頭する遠因ともなったのです。

一方、関東における戦国時代は、史料が豊富で研究が先行している後北条氏の発展過程を軸として解説されることが多く、後北条氏以前の実態には関心が比較的低かったのですが、近年の研究により、関東諸豪族から鎌倉公方の嫡流とみなされた古河公方を頂点とする、ある一定の権力構造が存在したことが明らかになっています。後北条氏の関東支配の過程は、古河公方体制に接触し、その内部に入り込み、やがて体制全体を換骨奪胎した後に、自らの関東支配体制の一部として包摂する過程でもあったのです。

従って、関東における戦国時代は、古河公方成立で始まり、豊臣秀吉による後北条氏滅亡で終結したとも言えます。

忍　城

模擬御三階櫓

[見学：御三階櫓（１９８８年に再建されたもの）、石田堤、行田市郷土博物館]

見どころ：忍城は、「行田市本丸」という地にあります。城の周囲はかつて湿地帯に囲まれており、典型的な「水城」として知られています。1509年（永正6年）、連歌師の宗長が忍城を訪れ、その際、城の周囲が沼に囲まれ、霜で枯れた葦が幾重にも重なり、水鳥が多く見え、まさに水郷であると日記に記したほどです。石田三成が陣を敷いた「丸墓山古墳」の上からの眺望で実感が掴めるものと期待しています。

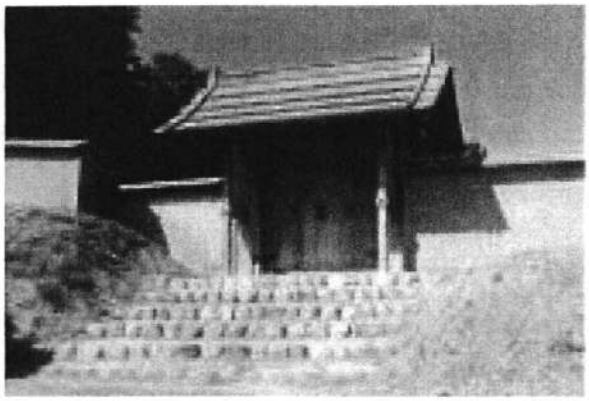
一昨年、映画「のぼうの城」で一躍有名になったのが、武蔵国「忍城」です。1478年（文明10年）頃、地元の豪族であった成田正等・顕泰父子がこの地を支配していた扇谷上杉家に属する忍一族を滅ぼし、築城したといわれています。翌年、これに反発する扇谷上杉家に忍城を攻められるものの、同家の家宰太田道灌の仲介によって和解して以後、成田氏が領有。河越夜戦後北条氏が関東に勢力を伸ばすが、成田氏はこれに反発。1553年（天文22年）に北条氏康は忍城を攻めるものの、攻略に失敗しています。

1559年（永禄2年）、上杉謙信が関東に遠征してくると、成田氏はこれに恭順。1561年（永禄4年）の上杉謙信による小田原城攻めには、当時の城主の成田長泰も参加しています（小田原城の戦い）。しかし、鶴岡八幡宮での関東管領就任式後に離反。1574年（天正2年）には上杉謙信に忍城が包囲され、城下に火を放たれたが、持ちこたえています。

1590年（天正18年）、豊臣秀吉の関東平定の際、城主・成田氏長は小田原城にて籠城。従兄弟の成田長親を城代とし、家臣と農民ら3,000の兵が忍城に立てこもりました。豊臣方の忍城攻めの総大将は石田三成で、大谷吉継、長束正家、真田昌幸、信繁父子らも加わりました。三成は、本陣を忍城を一望する近くの丸墓山古墳(埼玉古墳群)に置き、近くを流れる利根川を利用した水攻めを行うことを決定し、総延長28キロメートルに及ぶ「石田堤」を建設しました。しかし忍城はついに落城せず（三成の予想では城が水に沈むはずであったが、忍城の地形が周囲より高かったため沈まなかったようです！）、結局は小田原城が先に落城したことによる開城となり、城側は大いに面目を施すことになったのです。このことが、「忍の浮き城」という別名の由来となりました。

鉢　形　城

本丸跡



四脚門（復元）

[見学：鉢形城歴史館、四脚門、石積土塁（土塁の表面に川原石を積み上げただけで、裏込め石は使用されていないので今でいうところの石垣とは呼べませんが、関東における戦国期の石垣のありようがよくわかる遺跡です。）、鉢形城復元地形模型]

見どころ：鉢形城跡では堀や土塁が良く残り、堀や土塁によって区切られた本曲輪や二の曲輪などの空間が現在でも確認することができます。なお、二の曲輪・三の曲輪・笹曲輪は平成9年度から13年度にかけて発掘調査が行われ、その成果をもとに、馬出や堀・土塁の復元整備が進められました。特に、三の曲輪では戦国時代の築城技術を今に伝える石積み土塁や四脚門、池などが復元されています。　なお、鉢形城歴史館は外曲輪の一角に建てられています。

この鉢形城は、関東における戦国期の城跡の「大将格」にあたります。広さは約２４万平方メートル。８０年以上も前の昭和7年には国史跡に指定されています。城の中心部は、荒川と深沢川に挟まれた断崖絶壁の上に築かれていて、天然の要害をなしています。この地は、交通の要所に当たり、上州や信州方面を望む重要な地点でした。すなわち、この鉢形城の位置は、秩父から雁坂峠を越えると、武田氏の領国である甲斐に到達しました。鎌倉街道上道（かみつみち）を利用すると、上野国を経て越後国や信濃国へ行くことも可能でした。敵の動静を探るうえで重要な拠点であった所以です。

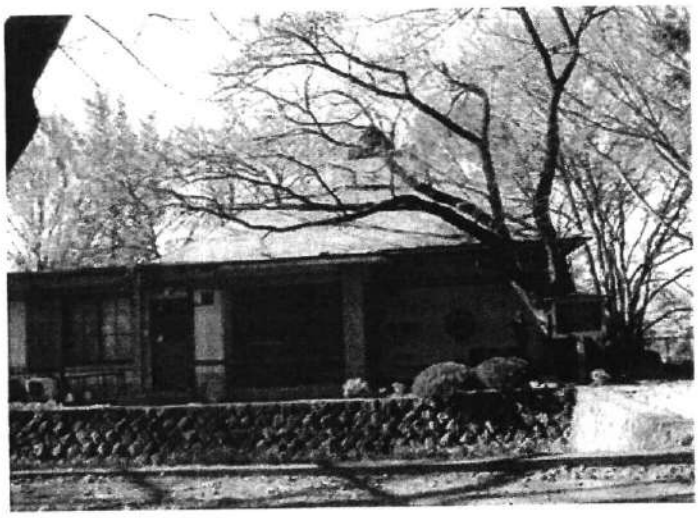
その縄張りは唯一平地部に面する南西側に大手、外曲輪、三の曲輪（三ノ丸）の三つの郭を配し、両河川の合流地点である北東側に向かって順に二の曲輪（二ノ丸）、本曲輪（本丸）、笹曲輪と、曲輪が連なる連郭式の構造となっています。搦手、本丸、二ノ丸、三ノ丸および諏訪曲輪には塹壕をともない、また北西側の荒川沿岸は断崖に面しています。荒川の断崖を取り込んだ姿は、「地軸から万尺も高くそびえたち、鳥ものぞくことが難しい」と評されていたようです。

鉢形城は、1476年（文明8年）関東管領であった山内上杉氏の家臣長尾景春が築城したと伝えられています。後に、この地域の豪族藤田泰邦（ふじたやすくに）に入婿した小田原の北条氏康の四男氏邦（うじくに）が整備拡充し、現在の大きさとなりました。関東地方において有数の規模を誇る鉢形城は、北関東支配の拠点として、さらに甲斐（かい）・信濃（しなの）からの侵攻への備えとして重要な役割を担いました。

1590年（天正18年）の豊臣秀吉による小田原攻めの際には、後北条氏の重要な支城として、前田利家・上杉景勝等の北国軍に包囲され、攻防戦を展開しました。有力拠点ゆえに5万の軍勢に囲まれ、城にこもるのは氏邦以下３，５００。1か月余りにおよぶ籠城の後に、北条氏邦は6月14日に至り、城兵の助命を条件に開城しました。

開城後は、徳川氏の関東入国に伴い、家康配下の成瀬正一（なるせまさかず）・日下部定好（くさかべさだよし）が代官となり、この地を統治しました。

塙保己一記念館



見どころ：当会で、今年５月に訪問した「塙保己一史料館（温故学会）」（渋谷）で斎藤館長ならびに根岸國學院大學教授に話していただいた、あの塙保己一の生家近くに建てられた「記念館」です。保己一の遺品及び関係資料を見ることが出来ます。中でも、保己一の母「手縫いの巾着」は必見です。なお、この記念館は、中世のころ山内上杉氏の居城として築城された「雉岡（きじがおか）城」の跡に建てられたもので、一帯は城山公園と呼ばれており、雉岡城の空堀・本丸・二の丸跡が残っています。

塙保己一（はなわ ほきいち）

江戸時代の国学者。7歳にして失明するも、驚異的な記憶力で数万冊の古文献を耳から暗記。日本の歴史や文学、古い法律や制度についての資料を収集し、後世の研究に役立つように、次々と文書保存を行いました。中でも、代表的な事業として知られているのが『群書類従』（ぐんしょるいじゅう）です。これは、日本の政治、経済、社会の出来事などを記録し、保存するために、古典や古文書を収集、分類、校訂し、木版刷りで出版した666冊におよぶ日本最大の国書の叢書（シリーズ本）。その後の歴史、文学など学術研究に大きく貢献したばかりではなく、現代でいう情報公開制度の先駆けとしても注目されています。また、同書は日本初の大型出版事業であり、保己一はその編さん者、出版人としても高く評価されています。ちなみに、400字詰めの原稿用紙の体裁は、塙保己一が出版事業を手掛ける際に考案されたものと伝えられています。

塙保己一は、武州児玉郡保木野村（現在の埼玉県本庄市児玉町保木野）に生まれました。塙は師の雨富須賀一の本姓を用いたもので、荻野（おぎの）氏の出自。幼少の頃から身体は華奢で乳の飲み方も弱く、丈夫ではなかったようです。草花を好み、非常に物知りであったといいます。7歳のときに、肝の病気がもとで失明。あるとき、虎之助のことを聞いた修験者が生まれ年と名前の両方を変えなければ目が治らないと進言し、名を辰之助と変え、年を二つ引いた。しかし、目痛や目やには治ったものの、視力が戻ることはありませんでした。

その後、修験者の正覚房に弟子入りして、多聞房という名をもらうも、視力は戻らず。手のひらに指で字を書いてもらい、文字を覚え、手で形をさわったり匂いを嗅いだりして草花を見分けることができたといいます。目が見えなくなってから和尚や家族から聞いた話を忘れることはなく、一言一句違わずに語ることができたほど、物覚えが良かったようです。10歳になると、江戸で学問を積んで立派な人間になりたいと考えるようになるが、両親が反対するだろうと悩んだが、宝暦7年（1757年）6月13日、母きよが過労と心痛で死去。形見としてきよのお手縫いの巾着（今回の見学では必見のグッズ！）をもらいました。

宝暦10年（1760年）、江戸に出、永嶋恭林家の江戸屋敷のもとに身を寄せ、約3年間を盲人としての修業に費やし、17歳のとき盲人の職業団体である当道座の雨富須賀一（あめみやすがいち）検校に入門し、名を千弥

と改め、按摩・鍼・音曲などの修業を始めました。しかし生来不器用でどちらも上達せず、加えて、座頭金の取り立てがどうしても出来ず、絶望して自殺しようとしました。自殺する直前で助けられた保己一は、雨富検校に学問への想いを告げたところ「3年の間たっても見込みが立たなければ国元へ帰す」という条件付きで認められました。

保己一の学才に気付いた雨富検校は、保己一に様々な学問を学ばせ、国学・和歌を萩原宗固（百花庵宗固）に、漢学・神道を川島貴林に、法律を山岡浚明に、医学を品川の東禅寺に、和歌を閑院宮に学びました。
塙保己一は書を見ることはできないので、人が音読したものを暗記して学問を進めました。保己一の学問の姿勢に感動した旗本の高井大隅守実員の奥方に、『栄花物語』40巻をもらい、初めて書物を所有。名を保木野一と改めて、明和3年（1766年）雨富検校より旅費をうけ、父と一緒に伊勢神宮に詣で、京都、大阪、須磨、明石、紀伊高野山などと60日ほどにわたって旅をしました。明和6年（1769年）に晩年の賀茂真淵に入門し、『六国史』などを学びました。安永8年（1779年）、『群書類従』の出版を決意し、検校の職に進むことを願い心経百万巻を読み、天満宮に祈願しました。

天明3年（1783年）に検校となり、寛政5年（1793年）幕府に土地拝借を願い出て和学講談所を開設、会読を始めました。ここを拠点として記録や手紙にいたるまで様々な資料を蒐集し、編纂したのが『群書類従』です。文政4年（1821年）2月には総検校になり、同年9月に76歳で亡くなりました。

エピソード：塙保己一が、ある晩「源氏物語」を講義していると、風が吹いてローソクの火が消えてしまいました。門人は、書物が見えなくなってしまったので、「先生、ちょっと待ってください。」と頼むと、保己一は「明かりがなければ見えぬとは、さてさて、目あきというものは不自由なものだ」と言って笑いました。
＜ヘレン・ケラーの言葉＞（昭和１２年４月２６日、ヘレン・ケラーは「温故学会」を訪問しています。
「私は母から、塙先生をお手本にしなさい、と言われて育ちました。今日、塙先生の御像に触れることが出来たことは、日本に来てもっとも有意義なことと思います。頭を傾けておられる敬虔なお姿と、手垢の染みた御机に、心からの尊敬を覚えました。先生の御名は、流れる水のように永遠に伝わることでしょう。」

足利氏館（鑁阿寺）

国宝　鑁阿寺本堂

太鼓橋と楼門（山門）

[見学：本堂（国宝）、鐘楼（重要文化財）、楼門（山門）、太鼓橋、西門（鎌倉時代）、多宝塔、経堂（室町時代）、大いちょう（天然記念物）]

見どころ：「日本１００名城」に選ばれています。史跡名は「足利氏宅跡（鑁阿寺）」。寺は真言宗の名刹として知られています。１２世紀後半、中世武士の館の面影を伝える史跡がなぜ名城なのでしょうか？一辺２００メートル前後の方形をしており、水堀の内側に土塁を巡らし、内部の居宅などを守った立派な「平城」だからです。

平安時代末期、この辺りで、藤原氏の流れをくむ藤原姓足利氏と八幡太郎義家の血を継ぐ源姓足利氏が争い、藤原姓が衰退し源姓が支配権を確立しました。今一般的に知られている足利氏は、この源姓の流れを指します。

源姓足利氏の礎を築いた足利義兼（よしかね。足利義康の第三子で源頼朝の従弟）が、文治5年（1189年）居館として足利氏館を整備しました。持仏堂を建てて大日如来を祀ったと言われ、次の代の義氏が持仏堂を発展させて「鑁阿寺」とし、足利氏の氏寺となりました。室町幕府を開く足利高氏（のちの尊氏）は、義兼から数えて7代目に当たります。ちなみに、義兼の僧名が「法華房鑁阿（ばんな）」で、鑁阿寺はここからきています。

吉川英治の小説「私本太平記」で、若き高氏がこの鑁阿寺で祖父高時の「遺言状」を読み、天下取りを「われより三代の後の子に嘱す。わが意を次げよかし」と書いてあるのに驚く場面がありますが、「将軍になる前、高氏が足利に住んだ物的証拠はないんです」と市教育委員会文化課の板橋稔さんは話しているようです。

その後、高氏は新田義貞・楠木正成等と争い、征夷大将軍に就きました。ここ鑁阿寺は足利将軍の「原点」を体感できる場所です。

平成25年8月7日付けの官報告示により、鑁阿寺本堂（大御堂）は「国宝」に指定されました。文化庁は、鑁阿寺本堂を国宝に評価した理由について、「鑁阿寺本堂は、足利氏の居館跡に建てられた中世の密教本堂で、鎌倉時代最新の建築様式である禅宗様をいち早く導入した。後の宗教建築の構造と意匠に大きく影響を与えた禅宗様の受容と定着の様相を示し、極めて価値が高い。また、様式の選択には明確な意図が認められ、我が国における外来新技術の受容のあり方を示しており、文化史的に深い意義を有している。」としています。

国宝指定となった本堂は、境内中央に南面して建ち、桁行5間、入母屋造で屋根は本瓦葺。鎌倉時代に建立された関東では数少ない仏堂で、国宝の建造物としては、関東以北で「中尊寺金色堂」「白水阿弥陀堂」に次いで古く、歴史的価値の高いものです。

本堂のほかにも、境内には鐘楼・経堂が国の重要文化財、東門・西門・楼門・多宝塔・御霊屋・太鼓橋が栃木県指定建造物、その他の市指定の建造物など数多く残っています。また、建造物以外にも、彫刻や文書（鑁阿寺文書615通）、美術工芸品など、中世以来の貴重な宝物類も今に伝わっています。

足利学校

[見学：入徳（にゅうとく）門、学校門、字降（かなふり）松、杏壇（きょうだん）門、孔子廟（聖廟）、方丈、旧遺跡図書館（市重要文化財）]

足利学校は、日本で最も古い学校として知られ、その遺跡は大正10年（1921年）に国の史跡に指定されています。

足利学校の創建については、奈良時代の国学の遺制説、平安時代の小野篁説、鎌倉時代の足利義兼説などがありますが、歴史が明らかになるのは、室町時代の永享 11 年（1439 年）関東管領・上杉憲実（うえすぎのりざね）が、現在国宝に指定されている書籍を寄進し、鎌倉円覚寺から僧・快元（かいげん）を招いて初代の庠主（しょうしゅ＝校長）とし、足利学校の経営にあたらせるなどして学校を再興してからです。

足利学校は、応仁の乱以後、引き続く戦乱の中、学問の灯を絶やすことなくともし続け、学徒三千といわれるほどに隆盛し、天文 18 年（1549 年）にはイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルにより「日本国中最も大にして、最も有名な坂東の大学」と世界に紹介されました。

江戸時代の末期には「坂東の大学」の役割を終え、明治 5 年（1872 年）に幕をおろしましたが、廃校直後から有志による保存運動が展開されるなど、郷土のシンボル、心のよりどころとして足利学校の精神は市民の中に連綿として生き続け、平成 2 年（1990 年）の復原完成へとつながり、教育の原点、生涯学習の拠点として、新しい学びの心の灯をともしています。

（太田）天神山古墳

（車中見学）

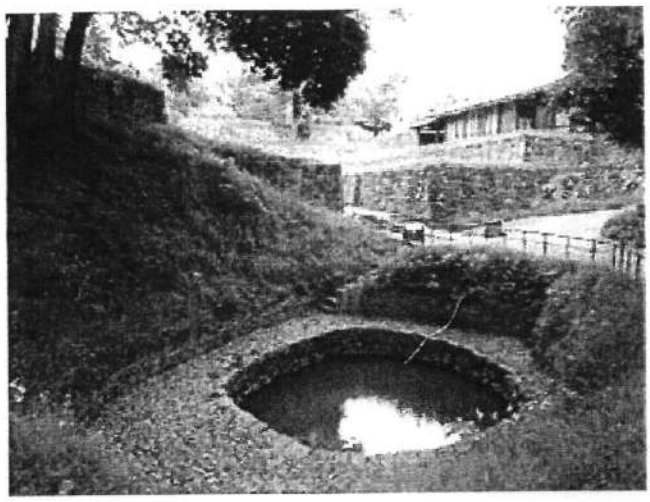
墳丘長は約 210 メートルで、平地に造営された東日本最大の前方後円墳です。墳丘は前方部が二段築成、後円部が三段築成で、渡良瀬川水系の川原石を用いた葺石をともない、周囲には二重の周濠を有します。
発掘調査により見つかった円筒埴輪や形象埴輪（水鳥の頭部）などの遺物や、石棺の技法および古墳の築造方法など遺構の検討より、およそ 5 世紀中頃から後半に造られたものと推定されます。埴輪は、墳頂部、下段、上段の平坦部に配列されていたと推測され、さらに、器財埴輪や家形埴輪の存在も推測されています。

主体部分である被葬者の埋葬施設は、後円部東南側に凝灰岩製の長持形石棺の底石が露出しており、盗掘された痕跡があり 5 世紀の畿内地方の大古墳にも採用されているものと変わらず、畿内の政権との関係が考えられます。副葬品については不明。 封土に若干毀損された箇所があるとはいえ、旧態をよく保持し、東国の古墳文化の様相を示す貴重な考古資料であるとして、 1941 年（昭和 16 年）1 月 27 日に国の史跡に指定されました。

なお「天神山」の名は、後円部の上に古くは天神様を祭る天満宮の社があり、これに由来。 別称「男体山古墳」といいます。東方に隣接して女体山古墳（帆立貝形古墳、全長 106 メートル、国の史跡）があります。

太田金山城

金山城鳥瞰図



月の池と大手虎口

[見学：ガイダンス施設、物見台（展望台）、日の池、月の池、大手虎口の石積]

見どころ：ふもとの「ガイダンス施設」で事前学習をして現地を見学します。この城の一番の特徴は、石積の多様さです。まさに「石の山城」。特に大手虎口の石積は威圧感十分。太田市文化財課宮田さんの話によると「石はこの山のもので、築城時に発生した石材を利用したのだろう。石積は築城当初からあったと考えられる。」そうです。また、「物見台」からは関東平野を一望に収めることが出来、その他の遺跡も含め、とても興味深い城跡です。

金山城（かなやまじょう）は、群馬県太田市のほぼ中央にそびえる標高 235.8 メートルの独立峰、全山アカマツに覆われた金山に築かれた山城です。金山の頂上にある山城で、現在は、本丸跡とされている地点に新田神社があります。背後の斜面には石垣の一部が遺存しており、往時のようすを現在に伝えています。関東平野を一望に収めることができ、西方は一段低くなっており「日ノ池」「月ノ池」があります。西南には二の丸跡、三の丸跡と呼ばれる曲輪が残り、これら曲輪につながる尾根群には堀切が設けられています。 また南曲輪には中島飛行機の創設者である中島知久平の胸像が建てられています。

1336 年（建武 3 年）に佐野義綱が新田庄の新田城を攻め落としたという記録があり、この新田城が新田義貞によって金山に建築されていたのではという説があるが、最近行われている発掘調査ではその時代の遺構や遺物は検出されていません。ただし城郭遺構の保護との兼ね合いのために万全な調査ができていないという一面もあるようです。

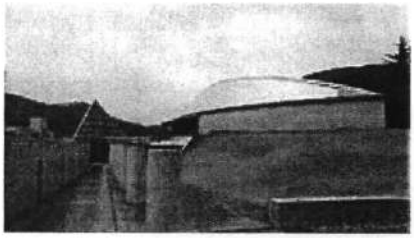
1469 年（文明元年） 新田一族であった岩松家純によって築城されました。以降、1528 年（享禄元年）に由良成繁・国繁親子、1584 年（天正 12 年）には北条氏と主は変わりましたが、上杉謙信の攻撃を退けるなど、関東七名城の一つとされています。

1590 年（天正 18 年） 豊臣秀吉の小田原征伐の際攻撃を受けて落城、こののち廃城となりました。

岩宿遺跡

岩宿遺跡A地点

ドーム遺跡



岩宿博物館

[見学：岩宿遺跡A地点、ドーム遺跡、岩宿博物館]

見どころ：1946年（昭和21年）、まだ国民みんなが飢えていた敗戦後二度目の秋、当時、歴史学も考古学も、土器を使う縄文時代が日本列島の歴史の始まりだと考え、1万年以上前の火山灰でできた関東ローム層の時代に「ヒト」は住めないと決めつけていました。二十歳の青年相沢忠洋（あいざわただひろ）が、日本の古代の歴史を変える大発見をしたのが、この「岩宿（新田郡笠懸村大字阿左美（あざみ）」です。

第2次世界大戦の頃までの考古学者は、発掘を進めて赤土（関東ローム層）が出るとそれを「地山」と呼び、それ以上掘ることはありませんでした。土器を使っていた縄文時代（世界史では新石器時代にあたる）の人々が日本の最初の住人だと考えていたからです。

この考古学・日本史の常識を覆し、日本にも世界史でいう旧石器時代段階に人々が生活していたことをはじめて明らかにしたのが、岩宿遺跡です。岩宿遺跡は、群馬県みどり市笠懸町阿左美地内の琴平山・稲荷山という小さな丘陵が接する部分に位置しています。

1946年（昭和21年）、切通しの道となっていた岩宿遺跡を通りかかった相沢忠洋は、切通しで露出していた赤土（関東ローム層）から、石器を発見しました。相沢はその後も、何度となくその崖を調査し、赤土の中から次々に石器を見つけましたが、土器が伴うことはありませんでした。当時は、1万年以上前の火山灰でできた関東ローム層の時代には、ヒトが住めなかったといわれていましたが、自分が確かめた事実を信じ、1949年の夏、ついに誰が見ても疑いようのない黒耀石の石槍を発見しました。

この発見は、いち早く東京の学者に知らされ、相沢と明治大学が岩宿遺跡を発掘調査することになりました。1949年（昭和24年）9月11日、岩宿の丘に立った発掘調査隊は、それまで未知の地層であった関東ローム層に挑み、ついにその地層の中から石器が出土することを確認しました。その後、その年の10月、翌1950年4月にも発掘調査が行われましたが、こうした一連の岩宿遺跡の調査によって以下のことが明らかとなりました。

その当時、最も古いと考えられていた縄文時代の土器がやや離れたC地点から発見されましたが、それらは関東ローム層より上の黒土に含まれていましたので、ローム層から発見された岩宿遺跡（A・B地点）の石器は、明らかに古いことがわかりました。そして、土器を伴わず、石器だけが発見されるため、縄文時代とは違う時代のものと考えられました。また、発掘調査によって関東ローム層中に層を違えて2つの石器群が発見されました。少なくとも約3万年前（岩宿Ⅰ石器文化）と約2万年前（岩宿Ⅱ石器文化）の時期があることがわかり、早くもこの時点で、岩宿遺跡の時代に異なる文化の段階があり、その岩宿時代が長い時期にわたっていたことが予想できました。

岩宿遺跡の発掘調査が終了し、新聞報道がなされると、日本にも「旧石器時代」があったことを証明する大発見として公表されました。それでも、日本に1万年以上も前からヒトが住んでいたことに疑問を持つ研究者もい

たようです。しかし、岩宿遺跡発掘の数年後にはその発見に刺激を受け、日本全国で同じ時代の遺跡が発見され、1万年をはるかに遡る岩宿（旧石器・先土器）時代の存在は疑いないものとなりました。

その後岩宿遺跡では、1970・71年（昭和45・46年）、岩宿Ⅰ石器文化よりも古い石器を求めて発掘調査が行われました（B・C・D地点）。その結果、「珪岩製旧石器」が発見されましたが、その資料の評価については、問題視する意見も多く、現在も論争が続いています。1979年（昭和54年）、岩宿遺跡は、重要な遺跡として国指定の史跡となり、保存と整備が進められました。その整備事業に伴い1987年（昭和62年）遺跡に隣接した部分が調査され、最初の調査と同様、2つの時期の石器群が発見されています（駐車場地点）。

1992年（平成4年）以降、岩宿遺跡の東隣りから岩宿時代の石器が発見されて、岩宿Ⅱ遺跡と名づけられました。そして2001年（平成13年）には相沢さんが発見し、岩宿遺跡発掘調査の契機となった槍先形尖頭器と同じ石器を含む約500点の一群の石器が発見されました。

高崎城趾

乾櫓（移設・復元）

高崎城の航空写真（1975年撮影）

[見学：乾櫓（移設・復元）、東門（同）]

見どころ：明治維新とともに城は無用となり、多くが壊されたり売却されたりしましたが、奇跡的に残ってお里帰りをしたものもあります。高崎城の堀に面してたたずむ「乾櫓」、隣の「東門」がその代表例でしょう。入母屋造の二層の乾櫓は白亜の壁から石垣に続く緩やかな「フォルム」がなんとも美しく、県内唯一の城郭建築として県重要文化財として指定され、渋い構えの東門は、市の重要文化財です。しかし、この二つ、元々は並立しておらず、乾櫓は「本丸」に、東門は「三の丸」にありました。高崎城は石垣がほとんどなく、乾櫓は土塁の上に立っていたようで、今ある下の石垣は移築時に基礎として造られたものです。乾櫓・東門とも、複雑な歴史を歩んで今の場所に立っているのです。

高崎城は烏川に沿って築城された輪郭梯郭複合式の平城です。本丸には御三階櫓（天守）と乾（いぬい/北西）、艮（うしとら/北東）、巽（たつみ/南東）、坤（ひつじさる/南西）の4基の隅櫓がありましたが、現存するのは乾櫓（県重文指定）のみ。本丸を囲むように、西の丸、梅の木郭、榎郭、西曲輪、瓦小屋があり、二の丸、三の丸が梯郭式で構えられていました。城の周りは土塁で囲まれ、石塁はほとんど造られなかったようです。かつて城内には本丸門など16の門があり、通用門として使われていた東門（市の重要文化財）だけが移築復元されて

現存しています。また、三の丸土塁と水堀は現在の町並みにも活きており、当時の面影を今に伝えています。

現在城址は市街化が進み、超高層 21 階の市役所や音楽センターなど公共施設が多く並び、お堀の周辺は高崎城址公園として、約 4.9ha が整備されており春には約 300 本のソメイヨシノやツツジが満開となります。城を囲む土塁の上は遊歩道になっています。

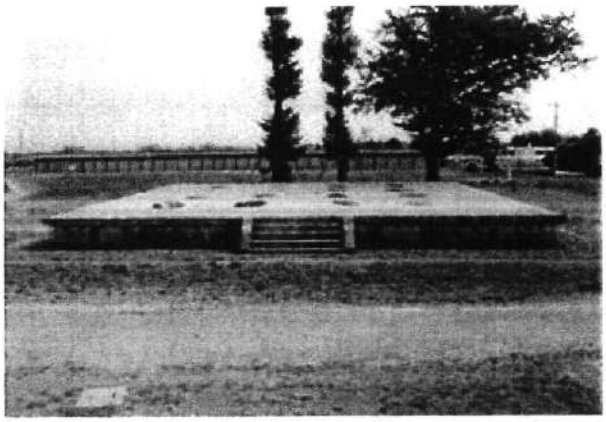
高崎城の地には古くは和田城と呼ばれる城がありました。和田城の創建は古く、平安時代末期に遡り、この地の豪族和田義信が築城したと言われています。

室町時代になり関東管領の支配するところとなると、和田氏は管領の上杉氏に帰属。永禄 4 年（1561 年）当時の城主和田業繁は帰属していた上杉謙信に反旗を翻し、武田信玄につき、和田城は上杉勢の度々の侵攻によく耐えました。その子、和田信業は、北条氏に属し、天正 18 年（1590 年）豊臣秀吉の小田原征伐の際には小田原城に籠城しました。和田城の留守を預かる信繁の子・兼業は、前田利家・上杉景勝等の連合軍に大軍をもって包囲され、4 月 19 日（新暦 5 月 22 日）に落城し、廃城となりました。

小田原征伐の後、関東には徳川家康が入り、それに伴い箕輪城主となっていた井伊直政は、慶長 2 年（1597 年）家康の命により、和田故城の城地に近世城郭を築きました。この地は中山道と三国街道の分岐点に当たる交通の要衝であり、その監視を行う城が必要とされた為です。翌、慶長 3 年（1598 年）直政は箕輪城から築城中の高崎城に移りました。直政は入城に際し、当地を「高崎」（箕輪城下に直政が創建した恵徳寺の開山龍山詠譚和尚の「松は枯れることがあるが、高さには限りがない」との進言により）と名付けたとされています。箕輪より町家や社寺を移して城下町を築きました。

慶長 5 年（1600 年）の関ヶ原の戦いの後、直政は近江国佐和山城に移封となり、その後は、諏訪氏、酒井氏、戸田氏、松平（藤井）氏、安藤氏、松平（長沢・大河内）氏、間部氏、松平（長沢・大河内）氏と譜代大名が目まぐるしく入れ替わり、明治維新を迎えました。

上野国分寺跡



復元された「七重塔」の基壇

版築で復元されたされた築垣

[見学：ガイダンス施設、七重塔の基壇（復元）、金堂の基壇（復元）、築垣（復元）]

見どころ：上野国の「国府（こくふ）」がどこに置かれていたかは、いまだ確定していませんが、天平 13 年（741 年）聖武天皇が発した詔により、全国に「国分寺」が創建されました。国分寺が建てられたこの地は、上野国のほぼ中央に位置し、北西に榛名山、北東に赤城山、西に浅間山のほか、国境の山々を見渡せる絶好の場所です。周辺には「大規模古墳群」や「豪族居館跡」など古墳時代の重要遺跡のほか、古代の有力寺社、中・近世に地域の拠点となった城館跡などが分布します。この地域は古墳時代以来、上野国の政治・文化の中心地でした。

奈良時代の天平 13 年（741 年）、聖武天皇は国ごとに僧寺と尼寺を造ることを命じました。これが国分寺で、後に僧寺が「国分寺」と言われるようになりました。当時の群馬県は上野国と呼ばれており、その国分寺は今の高

崎市と前橋市の境近くに建てられました。今からおよそ1,250年前、平城京（奈良県）を中心に全国を約６０の国に分けて治める律令政治が行われていました。

当時、災害や政治の乱れに苦しんだ聖武天皇は、仏教の力でこれを治めようと、国ごとに国分寺を造らせるとともに都には東大寺を建立しました。こうした寺院は政府によって造られましたが、各地方の豪族にも協力が求められました。上野国の国分寺は、政治の中心であり今の県庁にあたる国府の北西に、僧寺・尼寺がそれぞれ東西に並ぶように建てられました。

歴史書によると旧碓氷郡や旧勢多郡の豪族の協力により、750年頃に主な建物が完成したようです。　全国の国分寺の中でも、最も早い時期に姿が整ったものといえます。僧寺は東西約220メートル、南北約235メートルの広さをもち、周囲は築垣（土塀）で囲まれていました。その中央には本尊の釈迦像を祭る金堂と高さ60.5メートルもある七重塔が建てられていました。

古い記録や調査から1000年頃には築垣や門は壊れてしまいましたが、金堂などは残っていたことが分かります。しかし、1380年頃には、それも滅びてしまったようです。その跡は道路などで分断されずに現在までによく残っており、大正15年（1926年）に国の史跡に指定されました。塔の基壇は一辺が19.2メートルの正方形で、上面には17個の礎石が並んでいます。塔の規模としては国内最大級です。

箕輪城

箕輪城鳥瞰図

箕輪城の石碑

[見学：空堀、本丸跡]

見どころ：何といっても素晴らしいのが「空堀」です。本丸を巡るのは幅４０メートル、深さ１０メートルさらに深かったようで、発掘調査などでは１０メートルほど埋まっていることがわかっています。高崎市文化財保護課の秋本さんは「堀の雄大さが体感できるのが箕輪城の魅力。」と語っています。

箕輪城は榛名山東南麓の丘陵上を中心に、北東と南西の平地部を含んだ戦国時代の平山城（ひらやまじろ）です。東西約500メートル、南北約1,100メートル、面積約36ヘクタール（史跡面積＝約19ヘクタール）におよぶ西上野（にしこうずけ）の中核的な城郭です。北西から南東方向にのびる尾根上に主要な曲輪（くるわ）を直線的に配置し、さらにこれを核にして多数の曲輪を線対称状に配置しています。これらの曲輪を区画しているのは、本丸周囲を巡る最大幅40メートル、深さ10メートルに代表されるような広大な堀（今回の見どころ！）です。

西暦1500年前後に長野氏が築城し、その後４代にわたって長野氏の本拠でした。戦国時代の上野には関東管領山内上杉家が存在したが、上杉憲政が越後へ亡命した後はその重臣長野氏が残り、相模を本拠とする北条氏、

甲斐の武田氏、越後の上杉氏（上杉憲政の名跡を継いだ）が侵攻を繰り返す場であり、このようななかで長野氏は、上杉氏の後ろ盾を得ていました。長野業正（なりまさ）は「箕輪衆」と呼ばれる在郷武士団をよく束ね、「名君」と謳われて長野氏全盛時代を築き、最大の版図を有するに至りました。業正の代にはまた、武田信玄の侵略がたびたび繰り返されたが、これをよく退け安定した地位を保ちました。

1561 年（永禄 4 年） 業正が没すると（前年に没した説もあり）、14 歳（17 歳とも）で子の業盛が家督を継ぎました。業正は臨終に際し「我が葬儀は不要である。菩提寺の長年寺に埋め捨てよ。弔いには墓前に敵兵の首をひとつでも多く並べよ。決して降伏するべからず。力尽きなば、城を枕に討ち死にせよ。これこそ孝徳と心得るべし」と伝え、その死は永らく秘匿されました。しかし、業正の死を知るや信玄は再び西上野への侵攻を開始して、近隣の城を落とし、また調略を仕掛け寝返らせていきました。

1565 年（永禄 8 年）頃には箕輪城は孤立していき、翌 1566 年（永禄 9 年）武田軍は箕輪城への総攻撃を仕掛け、頼みの上杉謙信の援軍を待たずして 9 月下旬には遂に落城し業盛は自刃して果てました。こののち箕輪城は武田氏の上野経営の拠点と位置づけられ、有力家臣である甘利昌忠、真田幸隆（幸綱）、浅利信種が城代に任じられました。

1582 年（天正 10 年）2 月、天目山の戦いで武田氏は滅亡したが、この機に乗じ北条氏政の弟・氏邦が侵攻しました。しかし、同年、氏邦は織田信長の家臣・滝川一益により追われ、さらに、この年の 6 月、信長が本能寺の変で倒れると、北条氏直・氏邦の大軍が上野国に侵攻、神流川の戦いで一益を破り、氏邦が再度箕輪城に入城しました。

1590 年（天正 18 年） 豊臣秀吉の小田原征伐の際に、箕輪城は前田利家・上杉景勝連合軍の攻撃により開城しました。この年、徳川家康が関東に入封し、箕輪城は 12 万石をもって井伊直政に与えられ、直政は箕輪城を近代城郭に改造したが、1598 年（慶長 3 年）高崎城に移封され、それに伴って箕輪城は廃城となり、80 余年の歴史に終止符を打ちました。

沼 田 城

沼田城天守（想像図）

沼田城の石垣（発掘）

鐘楼（復元）

[見学：発掘された石垣、鐘楼（復元：ただし、「鐘」は 1634 年に真田信吉が鋳造させた「城鐘」そのもの。）、本丸跡]

見どころ：沼田城は信州の上田城と並ぶ真田氏の拠点。五層の巨大な天守閣があったことが正保（しょうほう）年間（1644 年～48 年）の絵図からわかっています。これは城主だった真田信幸が慶長 2 年（1597 年）に建てたとされています。五層の天守があったのは関東では江戸城と沼田城だけ。あわよくば天下を狙う真田氏の気宇壮大さが窺い知れます。徳川の天下になっても五層の天守は健在でしたが、1681 年失政などもあって 5 代信利が

改易となり、幕命により天守はもちろん櫓や石垣まで徹底的に破却されてしまいました。1657 年の大火で江戸城天守が無くなった後（振り袖火事）、関東では唯一となった五層の天守は徳川政権にとっては相当目障りな存在だったのでしょう。近年の発掘調査で、石垣の一部が発掘されています。必見！

沼田市は群馬県の北部に位置し、四方を山に囲まれた盆地を中心として、利根川や薄根川・片品川周辺には非常に高い河岸段丘が発達しています。

沼田公園のある崖上の台地に最初に城を築いたのは、鎌倉時代以来この地方の有力者であった沼田氏の 12 代万鬼斎顕泰（ばんきさいあきやす）で、天文元年（1532 年）の頃であると云われています。倉内（くらうち）城とも呼ばれたこの城は、関東へ至る要衝の地にあることから越後の上杉氏や小田原の北条氏、甲斐の武田氏などの戦国大名によりめまぐるしい争奪が繰りひろげられることになりました。

天正８年（1580 年）、武田勝頼の命により沼田に進出した真田昌幸（まさゆき）は沼田城を攻略し、さらに翌９年には沼田城の奪還に来攻した平八郎景義（へいはちろうかげよし）を謀殺して沼田氏を滅亡させました。しかしこれ以後、この地の領有を主張する北条氏とこれに応じない真田氏との間に沼田城をめぐって攻防が続きましたが、同 18 年（1590 年）に北条方が真田方の名胡桃城を不法に攻略したことが契機となり、北条氏は豊臣秀吉の小田原城攻めにより滅亡しました。秀吉は真田昌幸に対し信濃２郡と利根・吾妻の旧領を安堵（あんど）し、昌幸は沼田城を嫡子の信幸（のぶゆき）に与え信濃国（しなののくに）上田へ移りました。

２万７千石の真田氏初代沼田城主となった信幸は近世的な城郭の整備にとりかかり、二の丸、三の丸、堀、土塁、大門等の普請（ふしん）の後、慶長２年（1597 年）（一説には 12 年）には天守（てんしゅ）が完成したと云われています。現在の熊小屋付近に建造された天守は、幕府に提出した城絵図や古文書から規模は「九間（けん）十間（けん）」で「五層」であったことが分かっています。　真田氏はその後２代信吉（のぶよし）、３代熊之助（くまのすけ）、４代信政（のぶまさ）、５代信利（のぶとし）と約１世紀にわたって沼田領を治めていましたが、天和元年（1681 年）11 月、５代信利は江戸両国橋（りょうごくばし）用材の伐出し遅延と失政の名目で城地は没収、改易（かいえき）となりました。城は幕府に明け渡され、翌２年に城はすべて破却されて堀も埋められました。

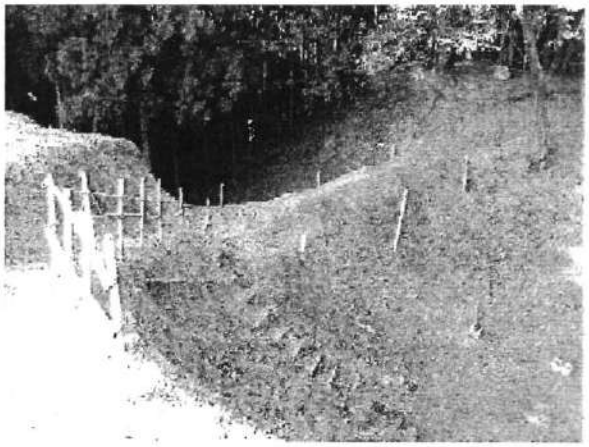
真田氏改易後、旧真田領は天領（てんりょう）となりましたが、元禄 16 年（1703 年）本多正永（まさなが）が幕府より沼田城復興を命ぜられ２万石で入封しました。しかし、城の本格的な復興はなされず、城破却で埋められた堀の整備や土塁の構築などが行われたのみで、本多氏３代のあとは再び代官支配となり、その後享保 17 年（1732 年）黒田直邦（なおくに）が３万石で入封し、２代続きました。寛保２年（1742 年）には土岐頼稔（ときよりとし）が３万５千石で入封し、土岐氏は 12 代頼知（よりおき）で明治維新を迎えて沼田城は廃城となりました。

真田氏改易以降は三の丸に藩邸が建造されたものの、天守が再び建造されることはありませんでした。

大正５年（1916）、旧沼田藩士の子である久米民之助（くめたみのすけ）（沼田市名誉市民）は、城地の荒廃を惜しみ私財を投じて購入して公園として整備し、大正 15 年（1926 年）に沼田町に寄付されました。現在、本丸と捨曲輪（すてぐるわ）と二の丸・三の丸跡の一部が沼田公園（一部市指定史跡）に、総曲輪（そうぐるわ）の一部が沼田小学校や沼田女子高等学校の敷地となっています。本丸跡に西櫓台（にしやぐらだい）と石垣、本丸堀の一部がみられ、僅かに城の名残を留めています。本丸跡には鐘楼（しょうろう）が建設され、真田信吉が鋳造させた城鐘（じょうしょう）（県指定重要文化財）が釣下げられています。

名胡桃城

名胡桃城址の碑



本丸虎口の木橋と堀

[見学：空堀、馬出、本郭など]

見どころ：沼田城から約5キロ。利根川を挟んで対峙するのがこの名胡桃城です。今はあまり知られていない山城ですが、歴史的には大きな役割を担っています。1589年真田氏が支配した名胡桃城を、北条方が約定を破って攻めたことが、豊臣秀吉の北条攻めのきっかけとなったのです。「豊臣秀吉の天下統一の端緒となった城」なのです。「空堀」で仕切られた「郭」が直線的に並んでいるところをよーく見学してください。

築城時期は、伝承によれば室町時代の明応元年（1492年）に沼田城の支城として沼田氏によって名胡桃館が築かれたのが最初とされています。史料上では、上杉景勝との甲越同盟により東上野の割譲を受けた武田勝頼が、天正7年（1579年）に家臣の真田昌幸に命じて、敵対関係となった後北条氏から沼田領を奪取するための前線基地として築いた城。昌幸は小川可遊斉と共に名胡桃館を攻略して隣接地に築城、ここを足がかりとして昌幸は沼田城攻略を企図し、調略の結果、沼田城を手に入れる事に成功するのです。

1582年の武田氏の滅亡後、天正壬午の乱を経て独立した真田氏と後北条氏が沼田・吾妻領をめぐって争うことになり、名胡桃城は沼田城の有力な支城として、沼田領に攻め入ってきた北条の軍を退けるのです。

天正17年（1589年）、豊臣秀吉の調停で沼田領は北条に引き渡されることとなったのですが、真田氏は「名胡桃城は祖先の墳墓の地である」と主張して、名胡桃城の譲渡を拒否、秀吉は津田盛月と富田一白を派遣し検分した結果、沼田城を含む利根沼田の3分の2は後北条氏領となったが、利根川を境として、名胡桃城を含む残り3分の1はそのまま真田領として安堵されたといいます。

名胡桃城には鈴木重則が城代として入ったが、同年11月、沼田城代となっていた北条の猪俣邦憲が、重則の家臣を寝返らせて名胡桃城を奪取（名胡桃城事件）。これが惣無事令に違反したとして秀吉の怒りを買い、翌1590年に小田原征伐が行われ、これによって後北条氏は没落することとなります。

しかし、名胡桃城事件については当時の資料が少なく、経緯についての多くが『関八州古戦録』など江戸時代に記された軍記物に依拠しており、不明な点が多いようです。豊臣側では、天正17年11月21日付けで秀吉が真田昌幸に与えた書状において「北条氏が国境の者に命じて真田氏の城に攻撃を掛け、城主を殺して城を乗っ取ったそうだが、言語同断であり、城を乗っ取った者を成敗するまでは北条氏を赦免できない」旨を記している、など、真田氏からの報告を元にした事件の概要を伺い知る事が出来るが、北条家当主氏直は豊臣側の詰問に対し、同年12月7日付け書状で「名胡桃城は真田氏から引き渡されて北条側となっている城なので、そもそも奪う必要もなく、全く知らない事である」旨を釈明しているなど、真相については不明な点が多いようです。

小田原征伐の結果、後北条氏が滅亡し、真田氏が沼田領を安堵されると名胡桃城は廃城となり、実際に使用されたのは約10年間だったのです。